

クツチンスキー著「生活領域と人口の諸問題」

R. R. Kuczynski, 'Living-Space' and Population Problems. Oxford Pamphlets on World Affairs, No. 8
1939

世界大戦後獨逸はベルサイユ條約に基き四邊の本國領土を削減せられたのみならず一切の海外領土をも剝奪されたのであるが、獨逸國民が戦後の慘憺たる生活に喘へぎながらも國家復興へと撓ゆまざる努力を拂ひつゝあつた間に於ても如何に失地回復への念願を内燃せしめつゝあつたかは推察に難くない。已に一九二〇年二月ミュンヘンに開催せられたる國民社會主義獨逸労働黨大會に於て公表されたる所謂ナチス綱領の第三條(註一)は獨逸國民の土地及領土獲得の要求が如何に熾烈なものであるかを示してゐる。然るに一九三三年一月ナチスが政權を獲得し獨逸民族國家建設へと邁進するに及んで、土地及領土要求の問題は愈々現實性を帯ぶるに至り、殊に西班牙問題一段落以後に於ては益々其強度を加ふるに至つた。従來獨逸は有ゆる機會を利用し、政府主腦の及學者を動員し、國の内外に向つて其要求を強調しつゝあつたが、英佛側も歐洲の平和問題の解決に對して植民地問題の解決が何より緊要であることを痛感し遂には原則的に之を認めるに

至つたと謂はれてゐる。斯くて植民地問題は外交上の問題として取上げらるゝ氣運に向つた。

(註一) Wir fordern Land und Boden (Kolonien) Zur Ernährung unseres Volkes und Ansiedlung unseres Bevölkerungsg. U'verschusses

一方此間に於て獨逸は、同じくベルサイユ條約に不満を抱くイタリーと提携し、所謂ベルリンローマ樞軸の威力に訴へ瞬く間に獨逸併合、チェッコ併呑、メーメル回收を實現し、次いで其の勢に乗じて矛をダンチツヒに向くるに至つたが、之が遂に今次歐洲動亂勃發の動機となつた。斯くて植民地問題の解決は當然戦後に持越さるゝ事となつたのである。表記の著書は獨逸の領土及植民地要求問題に關し獨逸側の論據の主なものに就いて逐次論駁したものであるが蓋し此問題に對する民主主義國家側の論調を代表したものと考へられる。

二

クツチンスキーは先づ最初に、一九三五年五月二十二日獨逸條約署名後に行はれた獨逸要人達のラヂオ放送に於ける祝詞中の例へば、「北はバルチックより南はリビヤに至る一億五千萬の國民を以て固く結ばれたる無敵の獨逸樞軸云々」といふ様な言辭中の數字(註二)を捉へて「彼等の手は分り切つてゐる、マインカンフで已に證明済だ、一億五千萬等と言はず、もつと大きな數字を使つて其れが到處で輿論に成る迄繰返し、宣傳したら宜しい。其の途方も無い數字は、其脅迫的效果は別としても、樞軸が處理し得る充分なる生活領域を持たないといふ議論に誠に重寶な論據を提供することは明白だ」と痛烈に皮肉つてゐるが、之に依つて本書に漲る鬱陶氣が良

く示されてゐる。

(註一) クッチンスキーに依れば當時獨伊プロックは一億二千五百萬人を包含する。

先づ最初に鎗玉に擧げられる獨逸側の論點はルーズベルトの平和勸告電報に對して爲したヒトラーの次の如き國會演説の一節である。『例へば有ゆる常識、論理、一般人類の、及びより高き正義の有ゆる原理、吾神の意志の法則に従つてさへ、總ての國民は世界物資の公平なる分前に與からなくてはならぬ』と。そこで著者はヒトラーの「世界物資の公平なる分前が抑、何を意味し又其の意味する所のものが果して獨逸の要求を正當化するや否やを檢討する。著者に從へば其れは勿論世界の七十二の獨立國が世界物資の各七十二分の一づゝ取るといふのでは無く各國が其人口に比例して分前に與かるべきである。しからば獨逸の分前は事實世界物資の四%以下であらうか、獨逸の國富及國民所得が共に世界人口の總ての富と所得の四%を遙に超えてゐるといふ事は事實で無いであらうか、否ヒトラーが焦慮しつゝある所は實はかゝる公平では無く世界の土地面積に關しての各國民への分前の公平である。さすれば一平方呎に付き人口一三五人の獨逸はベルギー(二七四人)和蘭(二四七人)英國(一九五人)日本(一八六人)伊太利(二四一人)をより生活領域に恵まれざる國と言ふであらうか、明かに然らず。所で生活領域を本國及屬領を含めた面積に對する人口の割合で計算するならば、成程獨逸は辛うじて世界面積の〇・五%世界人口の四%を占めてゐる事になるが然し獨逸のみが「持たざる國」なのではない。英國は世界面積の二六%世界人口の二四・六%を占め正當な分前である、米國も同様である、伊太利は右の如き意味に於ては、アルバニアの征服により却つて生活領域の

減少を蒙つたのであるが、依然「持てる國」であるから獨逸は英帝國よりも寧ろ伊太利の犠牲に於て生活領域を擴張した方がより公正であらうと英國を辯護してゐる。

次は過剰人口の問題であるが、之に就ては著者は次の如く論じてゐる。

成程獨逸は世界に於ける最も人口稠密な國である。しかし人口がより少なかつたら生活が良くなるといふのが獨逸の主張ならば、かゝる結論は現在の最適人口論に關する吾々の知識からは出て來ないと言はねばならない。しかし獨逸はそうは言つてゐないので、寧ろ反對に豊饒な人口を謳歌し、失業者が數百萬に達した一九三四年に於てすら自身人口過剰とは考へず、經濟的及軍事的見地から小なる人口より大なる人口を有利と考へた。それ所か斃て再軍備及公共事業が總ての失業者を吸収し、最近五年の間に七十萬の農業労働者が田舎から移住し、農業のみならず有ゆる産業が人手の不足に悩まされてゐる状態である。又保護領の新統治に於ける最初の行動の一つは多數の労働者をボヘミア、モラビアから獨逸に移送するに在つた。一方移入民は有ゆる方法で奨励されアフリヤ人の移出民は事實上禁止され、外國に在る男女の移民は本國へ呼戻されるといふ状態である。又獨逸は伊太利の例に倣つて各種の人口増殖政策を行ひ、殊に伊太利では行はれなかつた大規模な結婚貸付金制度を採用し、伊太利では失敗に歸した出産力増進政策は獨逸では大なる成功を収めたのである。此成功の一大原因たる結婚貸付金は最初は男子失業救済の目的を以て生れたものであるが、政府は此制度が偶然にも出生増加の有効なる手段たることを發見したので貸付條件を緩和するに至つた。著者は右の如き諸點を擧げて獨逸過剰人口論を否定してゐる。更に著者は一九三九年五月十九日に於けるゲツベルスの演説の一節『彼等は八千萬の獨逸人が一億三千万となる五十年後に於て地球が現在と

同一の分配状態にあると考へるのであらうか』を捉へ、獨逸統計局發表による獨逸の將來人口推計を引用し、その推計の基礎となつた未婚既婚女子年齢別出生率、婚姻率、乳兒死亡率、死亡率等に於ける獨逸側に有利な假定を無視するとしても、其推計によつてさへ獨逸人口は一九七〇年に於ける八〇五三五千人を頂點として以後漸減し、同時に人口の年齢構成にも變化を來し、經濟的軍事的見地から最も重要な生産年齢階級は一九四一年の三六、一二二千人を最高として漸減の道を進むことになり、ゲッペルスの主張は全く出鱈目だと非難してゐる。著者は右の如く獨逸人口政策及人口趨勢の二點から獨逸側の人口過剩論の成立せざることを主張してゐる。

更に著者は、人口過剩の問題を生活領域との關係に於て取上げ、獨逸はオーストリア、ズデーテン地方、メーメル併合ボヘミア、モラヴィアに對する保護領宣言により人口密度は平方料に付き一四五人から一三五人に低下したに過ぎない。ハンガリー及スロバキアの奪略によつてそれは一二六人に下るだらう。又現在委任統治下にある舊植民地の返還によつて、人口密度は三三人に低下するだらう。が其場合に於ける世界面積の分前は僅か二・六%に過ぎず一方世界人口に於ける分前は五・三%で問題は依然本質的には解決せられないが、それでもまだ獨逸は歐洲列強中の唯一の「持たざる國」と主張するに相違ない。更に世界の富と所得に於ける獨逸の分前が世界人口の分前と同一の割合で増加しないことは明白であるといひ、暗に領土獲得の無意味なことを仄めかしてゐる。かりに獨逸の生活領域が以上の如く擴張されても獨逸本國の人口密度が低下するといふ假定はなし得ないし又新領土から労働者を募り移出民を制限してゐる獨逸に取つて過剩人口を移送すべき領土の議論は成立しない。獨逸は最早人口過剩では無いと言つてゐる。

次は植民地と熱帯生産物の問題である。之に就いて著者は次の如く論じてゐる。獨逸舊植民地返還要求に對する主たる經濟的議論は熱帯生産物獲得の必要にあるが、獨逸側は、委任統治制度は獨逸に對しても委任統治列強と同じ經濟的公平を保證するものであるといふ主張に反對し、それは單に紙上の公平であり、假にそれが有效としても、其等の生産物に對し支拂ふ外國爲替の獲得が依然不可能であると、物資及通貨の側から植民地領有の必要を主張してゐる。そこで著者は英領カメルーンを引合に出し、一九三七年の同地方からの總輸出額の内獨逸に向けられた分は其の大部分を占め、之は同地方が獨逸下に在りし第一次大戰前よりも大である。通貨問題に就いては、英貨は成程英領カメルーンに於ける法貨ではあるが、同地の植林會社は殆ど全く英貨なしに馬克を以て商買を營み得るではないか、勿論獨逸の外國貿易上の地位は、他の舊植民地については此れ程惠まれてゐないにしろ英領カメルーンの一例は獨逸が外國委任統治下の熱帯地方生産物を外國爲替上何等本質的犠牲無しに獲得し得たことの證明である。又右の如き通貨事情から英領カメルーンの輸入に於ける獨逸の分前は四七・七%といふ有利な數字を示し斷然筆頭の輸出國であるといひ、獨逸の主張を論駁してゐる。

次に著者は舊獨領植民地の經濟的能力に就いて論じ、一九三六年に於ける舊獨逸植民地の總輸出額は、現在の非常に制限された所の獨逸總輸入額に對してさへ僅かに四或は五%を占めてゐるに過ぎないといつて其價值を低く評價してゐる。しかるに獨逸側は此の議論を否定し、強度の經濟開發により植民地の輸出額は大いに増加すべく、こゝ七八年の間に獨逸の輸入必要額の約一五%を充足しようと主張してゐる。殊に鐵に關しては獨逸側はトールランドを重視し、これは吾々に缺くる所の鐵礦の大部分を供給し得

るだらうとの議論に對し著者は、成程トーゴランドには鹽化鐵鑛の鑛床があるが海岸から遠距離にあるため商業上の重要性を持たない。尤も強度の經濟開發が行はれれば別問題であるが、こゝから獨逸に缺乏してゐる鐵鑛の大部分を供給するためには、多くの勞働者を必要とし、その大部分はアフリカに於ける他の獨逸保護領から補充する外はない。かくて強度の開發の結果として土人の死亡率は再び嘗ての獨逸統治方式の下に於て見られた如き言語道斷の水準に上昇し、その影響を蒙る土人の數は大戦前の幾倍にも達するに相違ない。尙かゝる強度の經濟開發に依つてさへ獨逸舊植民地からは輸入品の僅かな部分しか得られないことは疑無い。例へば食糧の供給の如きは無視し得る程度だらうと言ひ、植民地の經濟的價值を極めて低く評價するのみならず、暗に人道問題の見地から獨逸式の強度の開發の許し得べからざるを仄めかしてゐる。

最後の食糧問題に就いては次の如く論じてゐる。食糧の自給自足は現獨逸政府の主要目標の一であり、農業作付面積増加のため大なる努力が拂はれた。しかし其結果は現在迄の所失敗である。然し近年に於ける獨逸食糧自給自足度は八三%で、他の多くの國々は獨逸よりも低い自足度を持ち又其等の國の多くは全く植民地を持たないか或は殆ど食糧輸出の能力無き植民地を有するに過ぎない。然るに獨逸は食糧及秣の不足を自己の領域から供給せんと主張してゐる。この主張は獨逸舊植民地の獲得以上を意味するのであつて現にヒトラーは一九三九年四月國會演説に於て、明かに地球の富の再分配の必要を述べてゐるのである。しからば獨逸が假に舊植民地に對する主權を回復し、中歐及東歐に於て現獨逸の五倍の地域を征服しても獨逸の所謂生活領域は依然大いに不足であらうといひ獨逸の要求の無限にして且不條理なものとして之を難じてゐる。

三

以上の如くクツチンスキーは獨逸側の主張を所謂敵方の發表にかゝる公の資料に據つて論難し、しかも其手際も仲々鮮やかである。然し、彼の主張をそのまま承認する前に、彼が利用してゐる資料が特に獨逸側に不利なものではないかといふ點を特に考慮する必要があるし、尙故意に事實を歪曲したと認めざるを得ない箇所も若干あるが此等の點に就いてはこゝで検討する餘裕は無い。唯筆者は、著者にして眞に公平なる批判者たらんとせば何故「持てる國」が其領土に對して占有を主張し得るか、その積極的根據をも同時に吟味しなければなるまいと思ふ。本書に此點の缺けてゐることとは如何にも遺憾と言はざるを得ない。

(島村俊彦)

×

×

×

×